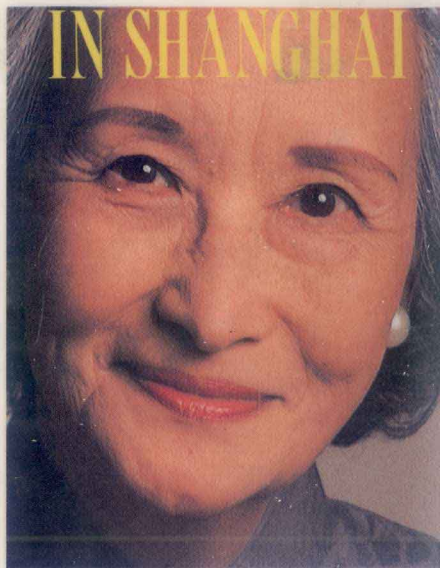


チエン・ニエン
鄭念 著

篠原成子 吉本晋一郎 訳

LIFE AND DEATH
IN SHANGHAI



上海 の 長い夜

上

文革の嵐を耐え抜いた女性の物語

原書房

篠原成子 吉本晋一郎 訳

LIFE AND DEATH
IN SHANGHAI

上海 の 長い夜 上

文革の嵐を耐え抜いた女性の物語

原書房

鄭 念 (チェン・ニエン)

1915年、北京生まれ。1935年～38年、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスに学んだ後、中国人外交官と結婚し、1941年～48年の間オーストラリアのキャンベラに在住。中国革命の後、シエル石油の上海支店長になった夫は、1957年に癌で亡くなるまで、その職にあった。その後、彼女は1957年～1966年の間、同支店の経営顧問をつとめた。鄭念は1980年に中国をはなれ、現在合衆国のワシントンD. C. に住んでいる。

篠原成子 (しのはら・しげこ)

1943年、東京都生まれ。1965年、東京大学教養学部(国際関係論)卒業。朝日イブニングニュース記者を経て、現在、翻訳に従事。主な訳書、N・ウェスト「スパイ伝説」(原書房)、M・ベシュロス「1960年5月1日」(朝日新聞社)、W・Rナイカー「ボルカー」(日本経済新聞社)他。

吉本晋一郎 (よしもと・しんいちろう)

昭和2年生まれ。鳥取県出身。朝日イブニングニュース編集局長を経て、朝日新聞東京本社編集局国際配信部にて英語ニュース記事の制作・国外配信に従事。主な訳書、パーク・ディヴィス著『山本五十六死す』、ロバート・カイザー著『ソ連の中のロシア』(全3冊)、スヴォーロフ著『ソ連軍の素顔』、同著『ザ・ソ連軍』(正・続)、ウラジーミル・ゴリアホフスキー著『ロシアン・ドクター』、同著『自由の代償』、チュオン・ニュ・タン著『ベトコン・メモワール』(以上原書房刊)他。

上海の長い夜(上)

1988年7月25日 第1刷発行 定価1800円

1988年10月19日 第10刷発行

著 者 鄭 念

訳 者 篠 原 成 子
吉 本 晋 一 郎

発行者 成 瀬 恭

発行所 原 書 房

〒160 東京都新宿区新宿1-25-13

電話・代表 03(354)0685 振替・東京 5-151594

本文印刷=(株)ディグ/製本=(株)小高製本

著者写真=©Thomas Victor

装幀=坂田優/扉写真=©平早勉

ISBN4-562-01948-4

上海の長い夜
(上)

梅平に捧ぐ

上海の長い夜

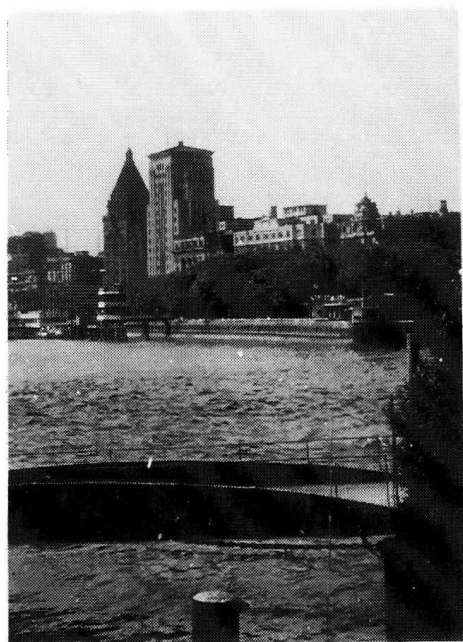
上巻・目次

1	魔女狩り——1
2	嵐の前の静けさ——45
3	紅衛兵——85
4	自宅軟禁——121
5	独房——157
6	取調べ——183
7	一月革命と軍事管制——215
8	党内の派閥——253
9	続く迫害——305

下巻・目次

10	弟の「告白」
11	一種の拷問
12	釈放
13	梅平はどこに
14	真相を求めて
15	ある異様な学生
16	毛沢東の死
17	復権
18	さらば上海
	エピローグ

1 魔女狩り



過ぎ去りしことは永遠に私とともにあり、そのすべては心に刻まれている。時は一九六六年七月、ある暑い夏の夜、上海のかつて私の物だった家の書齋にさかのぼる。娘は寢室で眠りにつき、使用人たちもそれぞれの部屋に下がり、私は書齋に一人でいた。

天井でゆつくりと回る扇風機の音が聞え、机の上の白い乾隆帝時代の壺に活けた白いカーネーションは、暑さに首を垂れている。目の前には壁を背に本棚があり、英語や中国語の書物がずらりと並ぶ。シェイドのついた読書用ランプの光で部屋の半分は影になっているが、白いソファの上には、赤い絹のクッションのにしき織りがキラキラと光る。

上海のこの家を、よく訪ねてくれたイギリス人の友人は、この部屋を「味気ない町のまんなかの、安楽と優雅のオアシス」と呼んでいた。実際のところ私の家は大邸宅でもなく、西欧の基準からすれば質素なものだった。しかし自分の家を私と娘にとって安らげる場所とするため、多くの時間をかけて工夫を凝らしてきたので、町はプロレタリアートの現実主義に支配されるようになっていたが、家では昔のままの良さを楽しむことができた。

共産党が中国を支配して十七年も経ってから、上海では私たちのような生活をしている中国人はそう多くはなかった。人口一千万というこの町で、おそらくわずかに十二、三組の家族しか昔の生活様式——以前から住んでいた家をそのまま所有し、使用人を何人か置いている生活——を保っていられたかっただろう。共産党は国民がどういう生活をすべきかについては、なにも定めていなかった。事実、一九四九年、共産党軍が上海に入ったとき、失業問題を悪化させないために、私たちは家で働いている使用人を解雇することを禁止された。

しかし一定の間隔で国を揺り動かしてきた政治運動で、昔裕福だった人たちの多くが貧しくなった。政治運動の犠牲になった人たちは巨額の罰金を払わされたり、所得を大幅にカットされた。そして多くの実業家は、工場を上海よりもっと内陸部へ移転させられ、家族とともに引越さねばならなかった。私は、自分から進んで

生活様式を変えることはしなかった。どうしてかと言えば、私には生活水準を維持していく手段があったばかりか、上海市の政府から統戦部を通して寛大に、しかも十分な配慮を払って遇うわていたからである。しかし、娘と私は用心深く静かに暮くらしていた。共產主義革命は、中国にとって歴史的必然だと信じていたので、私たちは共產主義革命とうまくやっていく心づもりがあった。

一九六六年七月三日の真夜中にあと二、三時間というこの時に、なぜこう何度も私の記憶がさかのぼるかという、娘との昔の生活をなつかしく思い出すからだけではない。私がその後何年にもわたって送れるはずだった正常な生活の、それが最後の二、三時間だったからなのだ。夜になっても、暑さが重い帷とろりのように町をおおっていた。開いた窓からは、微風も入ってこない。

私は机の上に広げた新聞に身をかがめ、いつも政治運動が始まる時には前ふれとなる、激しい非難の記事を読んでいた。私の顔と腕は汗でぬれ、ブラウスの背中も汗で冷たかった。そうした非難の記事は、適度に緊張した空気をかもし出し、大衆を動員する宣伝効果を狙ったものだった。共産党幹部の選んだ活動家を書いた一連の記事を注意深く読んでみると、運動の目的や犠牲者となりそうな人たちが、それとなくわかってくる。それまで私は政治運動に巻きこまれたことがなかったので、自分に災難がさし迫っているとの予感は無かった。しかし政治運動ではいつもそうなのだが、宣伝記事が使っている激しい言葉に不安を感じた。

じいやの趙老人が冷たいお茶の入った魔法ビンをお盆に載せて、応接用テーブルの上に置いてくれた。おいしいお茶を飲んでいて、私はなにげなく今は亡き夫の写真に目をやった。夫が亡くなってからほぼ九年になろうとしていたが、夫の死によってポツカリ空いた私の心の空隙くわいは未だに埋まっていなかった。政治状況が不安になると、とりわけ夫に先立さきだたれて一人になってしまった、という感じがした。私は、夫の支えが欲しいと思ったものだった。

私が夫に出会ったのは、一九三五年、夫がロンドンで博士号ドクトラートを取るため、勉学に励んでいたときだった。私

たちは結婚して、一九三九年に内戦中の中国の首都だった重慶に戻り、夫は国民党政府の外交官になった。一九四九年、共産党軍が上海に入ったとき、夫は国民党政府の外務省の上海事務所の所長だった。共産党の代表だった張漢夫が事務所を接収すると、張は移行期間のあいだ、新しく上海市長に任命された陳毅元帥の外交問題の顧問として、新政府に残ってくれるよう夫に要請した。

翌年、夫は人民政府を去ることを許され、シェル国際石油会社からの、上海支店の総支配人にならないかという申し出を受け入れた。シェルは当時、上海に事務所を残したいと思っていた、国際的な名声を有するイギリス企業の一つであった。インペリアル・ケミカル・インダストリーズ、香港上海銀行、ジャーディンズなども同じ希望をもっていた。シェルは中国大陸に残ることを希望した世界で唯一の大手の石油会社だったので、西側との貿易を望んでいた党幹部は、シェルを、そして私たちを丁重に遇した。

一九五七年、夫がガンで死亡すると、後任にはイギリス人が就任した。私はシェルから、経営幹部の顧問という肩書で、イギリス人総支配人のアシスタントをしてくれるよう頼まれた。私はその資格で一九六六年まで働いた。

当時は、共産中国で営業している資本主義の企業を取りまく落穴も多く、シェルのイギリス人の総支配人は、そうした落穴にはまらぬために私を頼りにしていた。シェルの尊厳を傷つけずに、しかも中国側の役人の面子をつぶさずに、私たちが直面した問題を解決する方法を見つけるのは、私の力にかかっていた。

私の仕事はスタッフをとりしきり、総支配人とシェル労働組合との連絡係として動き、組合側の要求を分析し、両者の折り合いをつけることであった。また、シェルと中国政府とのあいだの書簡のように、中国語でなければならぬことも重要な文書も私が起草した。

総支配人がホームリープや中国政府諸機関との話し合いのため、北京に行ったり、上海を留守にしたときはいつも私が代理を勤めた。自分にできる仕事もてて私は幸せと感じ、世界的に知られた会社の高い地位に就

いている上海で唯一の女性、という名譽に浴していた。

一九六六年の春、シエルは中国の政府機関と交渉し、「資産と負債に関する協定」を結んだのち、上海支店を閉鎖した。シエルは資産の管理を中国にゆだね、協定を結んだ中国の政府機関は、シエルの従業員を雇用し、退職年金も払うとの約束で引き継いだ。私は経営陣の一人だったので、この協定の対象には含まれなかった。協定が及ぶ範囲は、上海労働組合の一支部だったシエル労働組合に属しているスタッフに限られていた。上海労働組合は、ブルー・カラーとホワイト・カラーを管轄する政府組織である。

協定が調印されたとき、娘の梅平^{メイピン}は、上海電影製片廠（上海映画撮影所）の若手女優で、団員といっしょに北中国を公演中だった。娘が帰ってきたら、私は香港へ旅行しようと思っていた。しかし梅平が戻ってくるのを待っているあいだに、文化革命が始まった。娘の一行は文革に参加するようにと、撮影所から急遽呼び戻された。

政治運動を展開しているあいだ、役所の連中は決定を下すことをしぶり、仕事のペースは完全に滞らないにしても、総じて落ちることがわかっていたので、私は香港への旅行許可を申請して、拒否される危険を冒すのをやめることにした。拒否されれば、警察が保管している個人の身上調査書（訳注）にそのことが書き加えられるだろう。そうなると、将来の申請が難しくなることも考えられたからだ。通常の政治運動は一年くらいで収まるので、文化革命も一年より長いことはあるまいと信じて、私は上海に留まった。

訳注 中国では檔案という。

お茶を飲むと、いくらか涼しくなった。私は隣の寝室へ行き、シャワーを浴びてベッドに横になった。暑かったが、私は眠りに落ちた。翌朝、メイドの陳がやさしく揺り動かして起こしてくれるまで、ぐっすり眠った。ベッドの横のテーブルに置いてある時計を見る。まだ六時半だったが、陽はすでに窓の日よけを照らし、部屋の温度は上がっていた。

「奥さまの以前の職場から斉さんともう一人、男の人が奥さまを訪ねてみえています」と陳が言った。

「なんの用かしら」と私はものうげに尋ねた。

「なにも言いませんでした。でも様子がとつても変です。オフィスが閉鎖される前には、いつも玄関で待っていたのに、今朝はつかつかと居間に上がってきて、ソファに腰かけたんです」と陳は言った。

「もう一人はだれなの」

私は浴室のほうに歩いて行きながら尋ねた。斉は、上海労働組合の職場支部の副委員長だった。私は仕事柄、斉とはよく労使の交渉に臨んだものだった。斉は良きそんな人物だった。発言は筋が通っていたし、態度も強硬ではなかった。

「名前は知りません。その人は前に来たことはありません。警備員の一人じゃないかと思えます。背が高くてやせています」と陳は答えた。

メイドの説明から、その男はシエル労働組合の活動家の一人だと思った。シエルには一人も黨員はいなかった。組合にいる二、三人の活動家の行動から判断して、シエルのなかの監視人として上海労働組合のために行動するよう言われていることは知っていた。ほとんどが警備員か掃除人だったこのような活動家たちとは、じかに接していなかったのだ、その活動については、おもに部長たちを通してしか知らなかった。

ドアをノックする音がした。じいやの趙老人が陳にお盆を手渡すと、半開きのドア越しに「二人が奥さまに急ぐよう言ってます」と告げた。

「わかったわ、趙。今すぐ下りていきますって伝えてちょうだい。冷たい飲物と煙草をさし上げて」と私は言った。

私は急がなかった。考える時間が欲しかったし、これからなにが来ようと、それに対処する時間も欲しい。こんなに朝早くに、こういう男性が二人も訪ねてくる、というのはいつもとは違う。しかし中国では、人が講

義とか政治的な教化学習の会合に出席しなければならないとき、前もって知らされることはめつたになかった。だれでもそういった召集がかかった場合には、なにをしようとするべてに優先させて会合に出席すべきである、というのが役人たちの考えだった。

この二人も、政治的教化学習の会合に出席するよう言いに来たのだろうか、と私は考えた。上海の労働組合はシエルの元社員がこれまでより安い給料で政府機関に働く心の準備ができるよう、そうした教室を開いていたことを知っていた。

トーストを食べ、お茶を飲んでいるあいだに私は、シエルの閉鎖に至るまでの事柄を見直すことにした。会社と中国の政府機関とのあいだで行われた交渉全体を通して、自分自身の行動を再吟味してみた。こうした交渉すべてに私は総支配人のお伴をして行ったが、討議には一切加わらなかった。交渉を見ていて職場に戻ってから、総支配人にアドバイスすることだけが私の仕事だった。もしシエルに関する質問をされたら、ロンドンに書面で問い合わせるよう提案して手間どらせよう、と心に決めていた。

私は中国の女性が公の場所で人目をひかないように身につけていた、白い綿のシャツ、グレーのズボンに黒いサンダルという服装に着替えた。階段を下りながら、こんなに朝早く人を遣わした連中は、おそらく私をろうばいさせたかったのだろうと思った。落ち着いている印象を与えようと、私は意図的にゆっくり歩いた。

居間に入ると二人の男がソファの上に寝そべっており、テーブルには口をつけていないオレンジスカツシュが置いてあった。斉は私を見ると、これまでの習慣で立ち上がったが、活動家のほうが座ったままなのを見ると、ドギマギして顔を赤らめ、急いで腰を下ろした。私が部屋に入ったとき、もう一人の男が座ったままでいたのは、私に対する計算ずくの無礼な仕草であった。

一九四九年、共産軍が上海に入ってまもない頃、私の住んでいた地域を担当する新しい警察官が、初めて予告なしに行う定期的な家庭訪問に訪ねてきた。警官は正面のドアのところでじいやの趙老人をふり払うと、私

のいる居間につかつかと入ってきて、じゆうたんの上につばを吐いた。それが粗野な振舞によって自分の権力を見せつけることを目の当りにした最初であつた。それ以来、党の下の中は自分たちの劣等感を隠すため、誇張された粗野な振舞をすることが多いのを知ることになった。

私は混乱した斉ともう一人のほうの無礼な態度を無視して、ソファでなく椅子に腰かけ、穏やかに二人に訊ねた。

「なぜこんなに朝早くみえたんですか」

「あなたを集会にお連れするためです」と斉が言った。

「あんたがすぐくろくろくしていたから、おれたちはたぶん遅刻だよ」ともう一人の男は言うのと立ち上がった。

「なんの集会なの？ どこが主催しているの。私を参加させるために、あなた方をよこしたのはだれなの？」と私は訊いた。

「そんなに多くの質問に答える必要はないね。おれたちに権限がなきゃ、ここにこうしていやしないさ。シエルの元社員は全員、この会合に出席しなくちゃいけないんだ。これは非常に重要なんだ」とその活動家は言うのと、どうしようもないという調子で、「文化大革命が始まっているのを、あんたは知らんのかね？」とつけ加えた。

「文化大革命と私たちと、どんな関係があつたというの。私たちは民間企業で働いていたのであつて、文化的な機関ではなかつたわ」と私は言った。

「毛主席は、中国人民はみな文化大革命に参加しなくてはいけない、と言われています」と斉が引きとる。二人はかなりいらだたしげに話す。

「おれたちは遅刻だよ。すぐ行かなくては」

斉も立ち上がった。私はマントルピースの上の置時計を見た。八時十五分だった。

メイドの陳が、私のハンドバッグとネイビーブルーの絹の日傘を用意して、玄関で待っていた。私は、それを受け取りながらニコツとしたが、微笑は返ってこなかった。不安そうに私を見つめ、明らかにひどく心配していた。

「昼食には戻るわ」と私は陳を安心させようと言った。彼女はただうなずいただけだった。

趙老人が正面の門を開けて立っていた。心配していたようだが、なにも言わず、私たちが出ると門を閉めた。使用人たちの心配は、十分理解できることだ。毛沢東が統治するようになってから十七年のあいだに、数え切れないほどの人が政治運動の期間に家をとにして、二度とふたたび戻ってこなかったことを私たちはみな知っていた。

通りの人影はまばらだが、バスは厳しい顔つきをした乗客たちでいっぱいだった。路線が回り道になっているので、目的地に到着したときは九時を回っていた。

集会が開かれる技術学校の前には、若い男女がおおぜい集まっていた。私たちがバス停から会場のほうへ歩いてくるのを見つけると、二、三人が「奴らが来たぞ、奴らが来たぞ」と叫びながら建物のなかへ入っていった。

一人の男が出てくると、私を連れてきた二人に怒った調子で言った。

「なんでこんなに長くかかったんだ。集会は八時に始まることになっていたんだぞ」

すると二人は私のほうに顔を向けて言った。

「その女に聞いてくれ」そして急いで建物に入ってしまった。

男は私に「こっちへ来て下さい」と言った。私は彼について会場に入った。

大きな部屋はすでに人でいっぱいだった。集まっている人たちの前方に細い木のベンチがあり、座っている

人のなかには、シエルの医師やその他役職についていた何人かの顔が見えた。そのうしろには運転手、警備員、エレベーター係、掃除人、事務員だった人たちが、おそらく学校の生徒と思われる若い人たちのあいだに混じって座っていた。

通路やホールのうしろの空いたところにも、たくさんの人が立っていた。暑い日ざしが、むき出しの窓から息も詰りそうな会場に入りこんでいたが、扇子をバタパタさせている者はほとんどいなかった。会場には緊張しながら、なにかを期待して待っている雰囲気のみが広がっていた。

ほぼ九年にわたって同じ職場で働き、毎日お互いに顔を合わせていたのに、あてがわれた二列目の席に着こうと、私が元の同僚たちをかき分けて進んでいるときに、だれ一人として挨拶した者はなく、みな知らん顔をしていた。ほとんどが視線をそらしたが、私と目が合った二、三の人たちは、たいそう困惑した様子だった。

シエルのオフィスが閉鎖されてからのち、この人たちはどうしていたんだろうと思った。これらの人たちはシエルとシエルを接収する権限を有する人民政府の機関とのあいだで合意された「資産と負債に関する協定」で本当に損をしたのだ。ほとんど全員が非常に長いことシエルに勤務していて、一九二〇年代からの勤続者も何人かいた。日本軍が上海を占領していたあいだ、何人かは家も家族も捨てて、上海から戦時中の首都だった重慶のシエルのオフィスへ延々と困難な旅をした。残った者たちは上海で、シエルの敷地を接収した日本の石油会社のために働くよりは、と非常な経済的苦難にも耐えたのだった。

ほとんどの人は六十歳に近く、停年間近だった。協定には、全員が中国の機関に就職できると明記されていた。シエルでの職制と同等の仕事も与えられずに、単なる事務員とか通訳として、しかも退職年金もずっと減らされて低い給料で雇用されるというふうには、協定に述べられていなかった。協定を受け入れることを政府が望んでいたので、協定の条件にあえて反対する者は一人もいなかった。最後に総支配人のイギリス人と私が、組合の委員長から本当にそれでいいのかという確認をとろうとしたのだが、みな協定の条件でいいと言ってい